

CFCL が革新的である5つのエレメント

CFCLの高橋悠介さん(以下、敬称略)は、ニットというカテゴリーに革新をもたらし続ける独創的なクリエイターである。同時に、企業やブランドのあり方そのものを、時代の先を見据えるビジョンを携えてデザインしている戦略的な経営者でもある。その統合的な視座が、プロダクトの説得力と企業の持続性を同時に押し上げているのがCFCLの強みであるが、今回は特にクリエイションに対する考え方を中心にインタビューを行った。

中野香織=文
text : Kaori Nakano
photographs ©CFCL Inc.

“技術と向き合いながら
新しい価値を
作ることに執着する。
それが私のデザイン
プロセスです”

—Yusuke Takahashi



HERRINGBONE



太番手の再生ポリエステルとウールを用い、大胆なヘリンボーン柄を表現。ジグザグのグラフィックは、POTTERY シリーズの立体的なシルエットに調和するように無縫製ダーツに合わせてプログラミングされている。

INTERVIEW



photograph : Norifumi Fukuda(B.P.B.)

高橋悠介さん (CFCL 代表兼クリエイティブディレクター)

Yusuke Takahashi ●1985年生まれ、東京都出身。2010年、文化ファッション大学院大学修了。三宅デザイン事務所入社。'13年、ISSEY MIYAKE MENのデザイナーに就任。'20年、CFCL設立。'21年、第39回毎日ファッション大賞新人賞・資生堂奨励賞受賞。同年、FASHION PRIZE OF TOKYO 2022受賞。2022年よりパリ・ファッションウィークに参加。'24年、Vogue Business 100 Innovators : Sustainability thought leaders の一人に選出された。

社会を意識するデザイン哲学

高橋のデザインに対する考え方の基盤には、2010年から20年までの10年間、三宅デザイン事務所で過ごした日々から学んだ哲学がある。「一生さんは、デザインに意味や目的意識を与える重要性を教えてくれた」と高橋は語る。

「服のデザインが自己表現のエゴに陥ってはいけない。社会に必要とされる道具として、社会のために服をデザインしよう」という考えから、CFCL (Clothing For Contemporary Life : 現代生活のための衣服) をブランド名に掲げた。高橋は「現代に重用される服が本来、果たすべき役割」を問い続け、時代の変化や社会課題、サステイナビリティへの答えを服と服づくりのプロセスそのものに反映しようとしているのだ。

技術との対話が生む新しい形

CFCL最大の特徴は、ニットを最先端の3Dコンピューター・ニットイング技術で建築のように扱う点にある。

この技術を使えば、高橋は、織物が主流のファッション業界で、あえて編み物ニットにこだわり、その伸縮性や立体造形力に新しい可能性を与えた。縫製を省いて糸から直接成形する無縫製ニット(ホールガーメント)を応用し、縫い目のごわつきを解消し、廃棄物も大幅に削減。結果、サステイナブルで快適な着心地、美しいシルエット、そして「誰にでもフィットする」多様性の器となる衣服づくりが可能になった。

新しい形を生み出すプロセスには、技術との対話が不可欠だ。編み地のデータや糸、テンションなど、膨大なパラメータの微細な相互作用に対する理解が必要になる。思いどおりにならないプロトタイプ制作と向き合い、編み地との絶え間ないコミュニケーションを繰り返す中で、独自の造形力が鍛えられる。「デザイナー個人の美意識よりも、技術への執着と素材との真摯な対話が、新しい価値を生み出す原動力になる」と高橋は語る。

カテゴリーキラーを目指す

高橋は「ニット」というカテゴリーで世界一になる、つまり「ニット」の領域におけるカテゴリーキラーになるという革新的なビジョンを持っている。ダウンジャケットとえば、スウェーデンとえば、とブランドが連想できるように、ニットとえばCONO、と誰からもイメージされることを目指しているのだ。

そのための戦略として、「シャツやジャケット、カクテルドレスなど、従来の、布帛(織物)が担ってきた服づくりにニット技術を持ち込み、ニットの分野そのものを拡張していく」と明言する。ニットとえばセーターやマフラー、という世の中にはびこる既存の固定観念を覆す発想である。

ニットならではの伸縮・一体成形・エイジレス・多様な体型への適応、という機能性を武器に、編み地の特性とファッション性、建築的思考を融合させ、チームのニッターと協働しながら「ニッ

ベースとなる編み地から デザインした 衣服との関係

パリで発表された2025年秋冬VOL.10コレクションは、社会人類学者、Tim Ingoldの書『LINES: A Brief History』を道標に、この5年間ニットだけで服を提案してきた試行錯誤の過程を「線」と見立てた。曲がりくねり、折れ曲がり、次第に広がりが、新しい時代へと自由で力強い線を描く“Knit-ware”の物語が描かれた。写真は、このコレクションのために開発された中から、実際に衣服として仕上がった10種類の編み地。



ラインが段階的に広がっていく変形プリーツには、プログラミングの特殊技術を活用。凸部分が赤く、プリーツとプリーツの間の横段にはスリットがあり、逆折りになることで機能的なテクスチャーを生み出している。

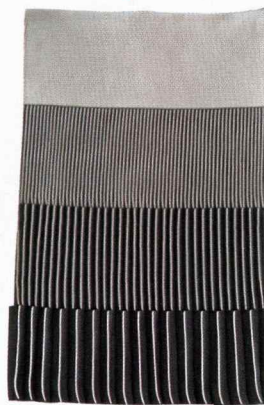
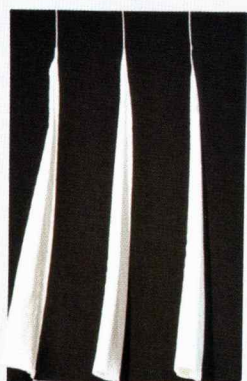


無縫製ニットの基本構造である「筒」からデザイン展開したドレスとトップ。ブラックのモノフィラメント（再生ポリエステル100%）とゴールドのメタリック糸で編まれた特殊な組織が、透明感のある凹凸を生み出す。

CONIC



ストライプが裾に向かって大胆に広がる様子を、印象的なショッキングピンクとレッドの強い色彩で表現。フレアドレスの前後の身頃はそれぞれニットマシンで量産可能な最大の編み幅で扇状に作られている。



CECが独特なのは、最先端技術の導入と同時に「人間の手に
よるクリエイション」の価値を重んじている点である。
「これからのAI社会で大切なのは、人間の感情や非合理性をどう
価値化するか。人の手で服を作る意義にこそ、クリエイション
の未来がある」と高橋は示唆する。袖口のテンションを一段絞める
か、衿もとのたわみをどの角度にするか。微差の選択が着用体
験の情緒を左右する。機械がもたらす均質は安心を生むが、人の
介入が生む揺らぎは色気へと転化する。感情が動くか、美しくな
れるかを重視したものづくりは、サステイナビリティや合理性の
先に、心を満たす価値として大切にされるだろうと確信する。

このように高橋悠介のクリエイションは、社会のためのデザイ
ン、最先端技術に対する執着、ニットという専門領域での頂点追
求、そして人間や社会への深いまなざしの共鳴で成り立っている。
CECの服は、合理性と情感、技術と人間性が融合する現代の「道
具」として私たちに寄り添いながら、衣服の未来を切り開いてい
るのだ。

人間の手と感情が支える 未来志向のクリエイション

「分業が当たり前」の業界慣習の中で、高橋はニットにおけるプ
ロフェッショナルリズムを貫こうとしている。そのために外部のニ
ットスペシャリストや工場とも連携し、細部にまで意図を落とし
込む。こうした体制が、他のブランドが到達し難い「カテゴリー
キラー」としての強みとなるのだ。

この問いに対して、高橋はファッション教育・産業構造につい
て説明する。服飾学校では、デザイナー志望者の多くが布帛・パ
ターンを専攻し、ブランドでは、コレクション全体の中に靴やバ
ッグ、ニットのスペシャリストが専門職として取り込まれるケー
スが多い。そのため、ニットをゼロから企画し、糸やデータをコ
ントロールしながら新しい衣服を構築できるデザイナーが育ちに
くいのだという。

CECは、世界でニットのカタゴリーキラーになり得る。なぜ
なのか？

産業構造と教育構造に対する鋭い分析力

その結果、ニットならではの着心地、軽さ、建築的立体造形美
による「O」の絶対的なアイデンティティが確立されていく。
「ブランドは、そのカテゴリーで一番であることが重要」と語る
高橋だが、実際、パリ・ファッションウィークからの発信を通じて、
今やCECは価値あるニットのクリエイションを牽引している。